

上古漢語書母に関する基礎的研究

野原将揮

はじめに

中古漢語の書母というとき *s[c] のように硬口蓋摩擦音を再構するのが通説である。ところが中古書母の起源、すなわち上古書母の音価については研究者の間に多くの出入りが見られる。そこで本稿では上古漢語書母の再構に関する先行研究を整理し、その問題点を指摘するとともに、それらの多くが出土資料を利用することにより解決可能であることを示す。本稿の上古音再構は出土資料を活用した上古書母再構の一つのモデルとなるものである。

1. 中古書母の音価と上古書母

上述したように中古書母には硬口蓋摩擦音 s[c] が推定される。その主要な根拠の一つが中国諸方言の対応である。以下に代表的な中国諸方言を挙げる：

【表1. 現代中国諸方言における書母の対応】

	北京	西安	蘇州	温州	長沙	南昌	広州	厦門	福州
書	ɕu	ɕu	ɕy	ɕɿ	ɕy	ɕy	ɕy	ɕu 文 ɕtsu 白	ɕtsy
舒	ɕu	ɕou ɕu	ɕy	ɕɿ	ɕy	ɕy	ɕy	ɕu 文 ɕts'u 白	ɕts'y
身	ɕən	ɕɛ̃	ɕən	ɕaŋ	ɕən	ɕən	ɕɛ̃n	ɕin 文 ɕsien 白	ɕsiŋ
申	ɕən	ɕɛ̃	ɕən	ɕaŋ 文 ɕseŋ 白	ɕən	ɕən	ɕɛ̃n	ɕin 文 ɕts'un 白	ɕsiŋ
升	ɕeŋ	ɕeŋ	ɕən	ɕeŋ	ɕən	ɕən	ɕiŋ	ɕiŋ 文 ɕtsin 白	ɕsiŋ 文 ɕtsiŋ 白
声	ɕeŋ	ɕeŋ	ɕən 文 ɕsaŋ 白	ɕeŋ	ɕən	ɕən 文 ɕsaŋ 白	ɕiŋ 文 ɕeŋ	ɕiŋ 文 ɕsɿa 白	ɕsiŋ 文 ɕsiaŋ 白

(『漢語方音字彙』参照)

厦門、福州等の閩語（網掛け部分）を除けばいずれも摩擦音が現れることが分かる（閩語では破擦音が見られる）。西安における [f] はそり舌子音が一定の条件のもと変化したもの、すなわち相対的に新しい変化を反映したものと考証されているため、ここでは扱わない。また梵漢資料で中古書母字が ʃ- と対応していることも書母の音価推定の有力な資料となる⁽¹⁾。

このように閩語を除く地域において、書母が摩擦音で現れることが中古書母に ʃ- を再構する拠り所となる。しかし、中古書母 ʃ- からそのまま上古書母に *ʃ- を再構することはできない。*ʃ- という再構音では上古書母をめぐる様々な現象を解決することができないからである。

2. 諧声系列から見る書母の由来と再構音

2-1. 諧声系列

ではどのようにして上古書母の音価推定を進めるべきだろうか。漢字の大部分が形声文字であるということを勘案すると、やはり諧声符を手掛かりにして諧声系列の分類を進めるのが有効であろう。そこで諧声符によって書母の典型例を分類してみると、5類（4類+分類不可1類）に分類することが可能である。以下、諧声符によって書母の典型例を分類した「表2」に基づき、それぞれの類を詳しく見ていきたい。再構音については次項2-2で述べる：

【表2. 諧声符に基づく上古書母の分類（典型例）】

	典型例	声符	諧声系列
(1)	書 賞	者声（章） 尚声（常）	都（端）、屠（定）、著（知）、諸（章）、署（常） 當（端）、堂（定）、掌（章）
(2)	舒 伸	予声（以） 申声（書）	杼（澄）、野（以）、序（邪）、紆（船） 神（船）、艸（以）
(3)	恕 燒	女声（娘） 堯声（疑）	女（娘）、汝（日）、怒（泥） 饒（見）、曉（曉）、饒（日）
(4)	聲 収	殷声（溪） 耳声（見）	馨（曉）、警（溪）、罄（溪） 叫（見）、糾（見）、菽（群）
(5)	身 手	身声（書） 手声（書）	—— 杼（徹母）

(1) 「書」「賞」——T-type 書母

諧声系列を見てみると「書」も「賞」も端母・知母・章母と諧声関係にあるが、以母・船母・邪母と諧声関係に無いことが分かる。たとえば「者声」の「書」諧声系列は以下の通り：

【者声の諧声系列】

	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
T	都		屠	著	褚	蹕	者		署	書	×	×	×

したがって、いずれも T-type に由来する——すなわち上古の T 系の音に由来する——書母字と見做すことができる⁽²⁾。本稿では、この種の書母を「T-type 書母」とする。

(2) 「舒」「伸」——L-type 書母

諧声系列に従えば「舒」「伸」のいずれもがL-type に由来する——すなわち上古のL系声母に由来する——書母と考えられる⁽³⁾。たとえば「舒」は中古澄母「杼」、以母「野」、邪母「序」、船母「紆」等と諧声関係にあるが、端・知・章母とは諧声関係に無い。

【予声の諧声系列】

	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
L	×			×		杼	×			舒	紆	野	序

上述した(1) T-type 書母とは全く異なる分布を示しており、典型的なL-type である。そこでこれを「L-type 書母」とする。

(3) 「恕」「燒」——N-type 書母

諧声系列を見てみると、「恕」「燒」のいずれもが鼻音と関連することが分かる。たとえば、「女」或いは「如」「奴」を声符と見るならば)書母「恕」は泥母「怒」、日母「汝」「如」等と諧声関係にある⁽⁴⁾。また鼻音以外にも透母「帑」とも諧声関係にある⁽⁵⁾。

【女声の諧声系列】

	泥	日	書	透	徹	心
N	奴	女	恕	帑	祭	祭

こうしてみると「恕」は鼻音 *n- から中古書母 s-[c] へ音変化したものと考えるのが良いだろう。反対に *s->th-、*s->n- というような音変化は想像し難いからである。*n->s という音変化については上古の鼻音（無声鼻音）が軟口蓋摩擦音である中古曉母へ変化することと併せて考えると(*hn->x-、たとえば泥母「難」と曉母「漢」等)、硬口蓋摩擦音への音変化も考えやすい(*hnj->s)。本稿では、このように鼻音と関係が深いことからこの種の書母を暫定的に「N-type 書母」と称す（Nを以て鼻音 n-m-ng-を表す。m-ng-については後述する）。ただし「燒」は第一口蓋音化を経て書母へと変化した可能性も考えられる(*hngj->hnj 或いは *hngj->xj)。

(4) 「聲」「収」——X-type 書母

諧声系列を見てみると、「聲」「収」のいずれもが中古見組と諧声関係にあることが分かる。たとえば「収」の声符「𠂔」は中古見母であり、見母「糾」、群母「葭」と諧声関係にある。これはいわゆる第一口蓋音化の例の一つであって、「収」は上古の牙喉音に由来し、後に口蓋音化したものと考えられる。以下ではこの種の——すなわち第一口蓋音化による——書母を暫定的に「X-type 書母」とする⁽⁶⁾。また近年、第一口蓋音化の例の一つとされる「聲」を牙喉音由来と見做すかどうかについての議論が見られるが、本稿では扱わない⁽⁷⁾。

(5) 「身」「手」——由来不明の書母

上掲の表2の諧声系列にもあるように「身」は書母と諧声関係にあるだけで、他の声母と諧声関係を有しない。また「手」は徹母「杵」と諧声関係にあるだけで他の声母と諧声関係に無い。つまり諧声符の分布からこれらの書母字が上古のどのような声母に由来するのか明らかにすることは不可能ということになる。以下では、このタイプの書母を「由来不明の書母」とする。

2-2. 先行研究～再構音～

上述のように諧声系列を軸に書母を分類してみると、(1) T-type 書母、(2) L-type 書母、(3) N-type 書母、(4) X-type 書母、(5) 由来不明の書母の5種に分類することが可能である。これら5種の書母は中古ではいずれも $s-[c]$ と再構されることは既に述べた通りである。では上古の(1)～(5)の書母にはどのような音価を再構すれば良いだろうか。本項ではまず研究者の間で広く認められている Baxter1992、鄭張尚芳2003、Baxter & Sagart 2011を例として挙げる (Baxter 1992を挙げるのは近年の上古音研究の基礎となる研究成果と考えるからである)：

【表3. 上古書母の推定音価～ Baxter1992、鄭張2003、Baxter & Sagart 2011～】

	書母字	声符	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart
(1)	書	者声 (章)	*stja	*hlja	*s-ta
	賞	尚声 (常)	*stjang?	*hjaŋ?	*s-tang?
(2)	舒	予声 (以)	*hlja	*hlja	*la
	伸	申声 (書)	*hljin	*hlin	*lin *li[n]
(3)	恕	如声 (日)	*hnjas	*hnjas	*na-s
	燒	堯声 (疑)	*hngjew	*hnjew	*ŋew *[ŋ]ew
(4)	聲	殷声 (溪)	*xjeng	*qhjeŋ	*leŋ *[l]eŋ
	収	斗声 (見)	*xjiw	*qhljuw	*s-kiw
(5)	身	身声 (書)	*hljin	*qhjin	*ŋiŋ *ni[ŋ]
	手	手声 (書)	*hju?	*hnjuw?	*ŋu?

* (Baxter1998:35-76以降) Baxter や Sagart は上古三等韻に *j- を認めない。たとえば Sagart & Baxter 2011では「書」は *s-ta、「賞」は *s-tang? となる。鄭張2003、Starostin 1989等も上古三等韻に *j- を認めない。いわゆる“新派”と称される研究者は三等韻に *j- を認めない立場であるが、三等韻の再構音に関する意見が必ずしも一致しているわけではない⁽⁸⁾。

(1) 「書」「賞」——T-type 書母

表3からも明らかなように、Baxter1992と鄭張2003の見解には大きな違いが見受けられる。Baxter1992は「書」の声符「者」や諧声関係にある「著」「屠」等が T-type であることを根拠に

「書」を *stja とする (Baxter&Sagart2011は *s-ta)。一方、鄭張2003は「書」のように T-type 書母と判断できるような諧声系列に所属する文字であっても *hlj- を考える。たとえば中古書母「詩」も諧声系列を見てみると明らかに T-type であるが、これについても *hlju と再構する⁽⁹⁾。鄭張2003のように再構した場合、諧声関係を説明できるかどうか疑問に感じられる。何故なら *hlja という再構音では「書」と「者」の諧声関係を上手く説明することができないだけでなく、「書」と「舒」の諧声現象に明らかな違いがあるにも拘らずいずれも *hlja と再構されて同音になってしまうからである。Baxter1992と鄭張2003の違いは以下の通りである⁽¹⁰⁾：

【T-type 書母の再構音】

	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart
T-type 書母	*stj-	*hlj-	*s-t-

(2) 「舒」伸——L-type 書母

Baxter1992、鄭張尚芳2003のいずれもが *hlj- と考えており、両氏の見解に大きな違いは見られない。ただし、上述したように鄭張2003の再構音では T-type 書母「書」と L-type 書母「舒」が同じように再構される点に注意されたい (例：鄭張2003「書」*hlja、「舒」*hlja)。

また音韻表記と実際に想定される音価について、Baxter1992と鄭張2003の音韻表記に差異は見られないが (いずれも *hlj-)、実際に想定される音価は異なるため注意が必要である。たとえば Baxter1992: 177は *hlj- を無声側面音 [lj] と考えるが、鄭張2003: 109, 154は *h と *l[ʃ] の複声母と考える。ただし、どちらも諧声系列を根拠に歯茎側面音を再構する点に於いて違いはない。

【L-type 書母の再構音】

	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart
L-type 書母	*hlj-	*hlj-	*ʃ-
	無声側面音	h- 複声母	無声側面音

(3) 「恕」「燒」——N-type 書母

N-type 書母について、Baxter1992と鄭張2003のいずれもが *hnj- や *hngj- と再構する (Baxter &Sagart2011は *ŋ-, *ŋj-)。鄭張2003は中古書母「少」が中古明母「秒」「渺」「妙」等と諧声関係にあることを根拠に *hmj-> ʃ- という音変化も認める。ただし、書母と明母の諧声関係は数が非常に限られており、これを認めるべきか否かやや疑問に感じられる。Baxter1992では「少」を *h(l)jew? と再構しており、明母との関係を積極的には認めていないようである (Baxter&Sagart2011は *s.tew?/*[s.t]ew?{})。

また N-type 書母について、上記した (2) L-type 書母と同じように両氏が想定する実際の音価には違いが見られる。Baxter1992:177は *hn-, *hng- を無声鼻音 [ŋ], [ŋ] とし、鄭張2003:109-110は無

声鼻音とは考えず複声母と考えている⁽¹¹⁾。その正否はともかくとして、「恕」「燒」のように鼻音と諧声関係の文字について、両氏が上古の鼻音に由来する書母——すなわち N-type 書母——と考えている点に於いては共通していると言って良いだろう。

【N-type 書母の再構音】

	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart
N-type 書母	*hnj-, *hngj-	*hnj-, *hngj-, *hmj-	*ŋ-, *ŋ̥-
	無声鼻音	h- 複声母	無声鼻音

(4) 「聲」「収」——X-type 書母

Baxter1992は *xj- とし、無声の軟口蓋摩擦音を考える。一方、鄭張2003は潘悟雲1997:10-24の仮説に従い上古喉音に口蓋垂音を再構するため、第一口蓋音化にあたる書母を *qhj- と再構する。軟口蓋摩擦音と口蓋垂破裂音というように、両氏の再構する音価は異なるけれども、「聲」や「収」等が牙喉音に由来すると考える点については Baxter1992と鄭張2003は一致していると言って良いだろう。また Sagart&Baxter2009:221-244では潘悟雲1997に従うとして、潘氏の説に修正を加え上古の牙音と喉音に口蓋垂音の再構を認めている。Baxter&Sagart2011では「聲」を *len̥|*[len̥] と再構し、「収」を *s-kiw と再構する⁽¹²⁾。注(8)でも述べた通り、Baxter&Sagart2011は「聲」を第一口蓋音化の例と見做していないようである。

【X-type 書母の再構音】

	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart	
X-type 書母	*xj-	*qhj-	*s-k- *q ^h - (屎等)	

(5) 「身」「手」——由来不明の書母

書母字に限らず、広く諧声関係を持たない文字は想像以上に多い。上述したように「身」は他声母との諧声関係を有しない。また「手」については徹母「扌」と諧声関係にあるだけである。後述する「首」についても、定母「道」「導」と諧声関係にあるのみである。したがって、これら文字については諧声系列から再構することが不可能に近いと言わざるを得ない。Baxter1992は「身」を *hljin と再構する⁽¹³⁾。また「手」については *hjuʔ と再構する。Baxter1992: 203に拠ると、この *hj- というのは一時的な措置ということである。鄭張2003では「身」を *qhjin と再構する。「身」に *qh- を再構するのは諧声系列上に中古溪母「鉤」が見えるからであろう⁽¹⁴⁾。ただし「鉤」が上古に既に存在していたかどうかについては疑問である。「手」について、鄭張2003は「扌」と「扌」の異文関係を根拠として *hnjuwʔ と再構する⁽¹⁵⁾。いずれにせよ諧声系列上で他の声母と関係が見出せない書母については、Baxter1992は *hj- 或いは *hlj- と再構し、鄭張2003は *hlj- と

再構していることが分かる。以下、再構音を比較されたい：

【由来不明の書母の再構音】

由来不明の書母			
	Baxter1992	鄭張尚芳2003	Baxter&Sagart
身	*hljin	*qhjin	*ɲin *ɲi[ŋ]
手	*hju?	*hnjuw?	*ɲu?
首	*hlju?	*hlju?	*ɬu?

ただし、後に Baxter も鄭張2003と同様に「手」を鼻音 *n- に由来すると考えている⁽¹⁶⁾。「手」については Sagart1999:155-156も参考になる⁽¹⁷⁾。

2-3. 「復元の強度」について

上古音を解するために清朝考証学者から様々な手法が試みられてきたが、その中でも諧声系列の分類が最も重要な作業の一つであると言って良いだろう。ところが上述の通りすべての文字に諧声現象が観察されるわけではない。諧声関係を持たない文字を扱う場合、たとえば閩語のような古い痕跡を残す方言や親族関係にあると思われる言語との比較をもとに上古音を再構するというような方法がとられる。しかしながら、常に再構の十分な証拠を得られるとは限らない。

平田2010:64は「水」を例に以下のように述べている：

“水”のような文字の字音について上古音を復元するのは困難である。Minimal Old Chinese という着想が提出されているが (Schuessler2009)、むしろ個別の字音の復元自体の「強度」を、確かめることも必要である。字音の正確な復元の試み自体を放棄せねばならない場合もあることは認めておくべきだろう。

以上のことは、恐らく上古音再構を試みる際、だれもが（無意識的ではあるにせよ）感じていたことかもしれないが、これまで「復元の強度」という語で直接言及されることは無かったことである。この「復元の強度」という新たな概念が示されたことで問題の所在を明確にすることができたのではないだろうか⁽¹⁸⁾。今後は個別の文字毎に「復元の強度」が異なることを意識的に明記し、再構を試みるが必要となるはずである。その中で、たとえば「水」のように再構することが不可能に近い文字について、どのように対処するかが今後の課題の一つであろう。

上述した「(5) 由来不明の書母」というのは、「復元の強度」が非常に低いと言い換えることができる。Baxter1992も鄭張2003も *hlj,*hj- 等と再構するに留まっている。以下では、出土資料中の通仮字に分析を加えることで「復元の強度」を高められる文字が幾つかあることを確認し、出土資料を使った上古音再構の一つのモデルを示したい。

3. 出土資料に見える通仮字を利用した書母再構

3-1. 由来不明の書母と「復元の強度」

出土資料に見える通仮字を分析することで、由来不明の文字を再構するための手がかりを得ることができる。以下では上述した「由来不明の書母」——すなわち「復元の強度」の低い文字——「身」について、出土資料に見える通仮字を例にして再構を試みたい。

①「身」について

上述したように「身」は他の声母と諧声関係を有しないため「由来不明の書母」と考えられる。ところが、たとえば『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』「緇衣」6号簡と『荆門市郭店楚墓竹簡』「五行」1号簡には以下のような通仮例がある（以下それぞれ『上博楚簡』『郭店楚簡』と略称する）：

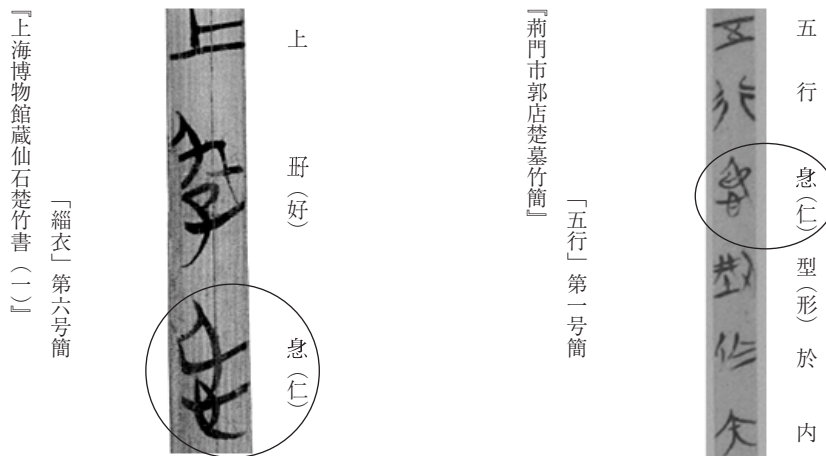


図1

図1のように『上博楚簡』「緇衣」、『郭店楚簡』「五行」に見える「息」はいずれも「仁」を表している。「仁」は中古で日母であるから上古でも鼻音 *n- と考えられる。この字は「身・心」の二つの文字構成要素からなる形声文字で「身」を声符と考えて良いだろう。中古で日母に読まれる「仁」が「息」と表記されるということは「身」も鼻音 *n- に由来する——すなわち N-type 書母——と考えられ、白一平2005でも同様に *hni[nŋ] と再構される。また古屋2006: 216-217では「身」や「人」等が同じ単語家族に所属する可能性が示されており、この点も「身」を N-type 書母と推定する論拠となる⁽¹⁹⁾。

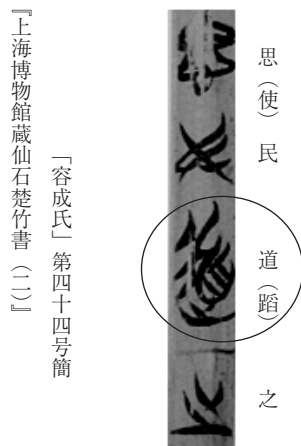
また「忝」のように「千」と「心」に従う字も見え、通常は「息」と同様に「仁」を表すが、『上博楚簡・孔子詩論』10号簡のように「年」に読まれることもある。この他に「千」を声符に持つ字というと楚簡中では「訃」が見え、これは「信」の異体字と考えられる。『説文』では

「信」は会意字とされるが、恐らく「人」が声符であることから（古屋2006: 216参照）、「千」も声符と考えることができる。

「仁」「人」は中古日母、「身」は中古書母、「千」は中古清母というように通常の通用可能範囲から逸脱している⁽²⁰⁾。「仁」「人」「身」「千」「年」が戦国楚簡で通用関係にあるということは、これらの文字が戦国期の楚地において未だ鼻音 *n- 或いはその類音を保存していたと考えられるかもしれない。戦国期の鼻音の状況については稿を改めて論じたい。

②「首」について

「首」も由来不明の書母と言わざるを得ない。「首」の諧声系列を見てみると、中古定母「道」、「導」と諧声関係にあるだけで上古のどのような声母に由来するか判断しがたい。したがって、「首」も「復元の強度」の低い文字の一つと言えよう。Baxter1992は *hlju?, 鄭張2003は *qhlju?/*hlju? とするように L-type 書母と考えているようであるが、実のところその根拠はあまり明確ではない⁽²¹⁾。いま戦国楚簡を見てみると、以下のような通仮例がある：



ここは「民にこれ（炭火）を踏ませる」という意味を表しており、「道」が「蹈」に通仮する。「蹈」の声符は以母「咎」であるから、「蹈」は L-type と考えられる（「蹈」*lus）。戦国楚簡中では T-type に所属する文字と L-type に所属する文字は互いに通仮しないことから（野原2009）、L-type 「蹈」と通仮する「道」も L-type に由来すると考えられる（「道」*lu?）。したがって「道」の声符と思われる中古書母「首」も L-type 書母であり、*hlju? と再構することができる。この通仮例は復元の強度の低い「首」を *L-type 書母と推定する論拠となるものである。

このようにこれまでの研究手法では「復元の強度」が低いと判断されるような文字——すなわち由来不明の文字——であっても出土資料の特性を生かし、そこに見える通仮字を用いることでより精密な上古音再構を試みるのが可能となる。また由来不明の書母は上古書母 4 類（T-type、L-type、N-type、X-type）のいずれかに由来すると予想されるが、全ての書母字について分析を加え終わるまでは慎重にならざるを得ない。

3-2. T-type 書母の再構

上述したように（2章）、鄭張2003は T-type 書母を認めていない。一方 Baxter1992は諧声系列を根拠に T-type 書母を認め *stj- というように再構する（Baxter&Sagart2011は *s-ta とする）。この点が両氏の再構音における大きな違いの一つである。T-type 書母を認めるべきか否か、以下で出土資料中に見える通仮字を例にして確認していきたい。

①「書」について

「書」は『説文』に拠ると「者声」であることが分かる⁽²²⁾。諧声系列の分布に従えば、者声の文字は T-type であるから、この時点で「書」も T-type 書母と考えるのが一般的である。ところが上述したように鄭張2003は T-type 書母を認めず、「書」を *hlja と再構する（L-type 書母の「舒」と同じ再構音になる）。ここで戦国出土資料の『上博楚簡』『郭店楚簡』を見てみると、以下のような例がある：

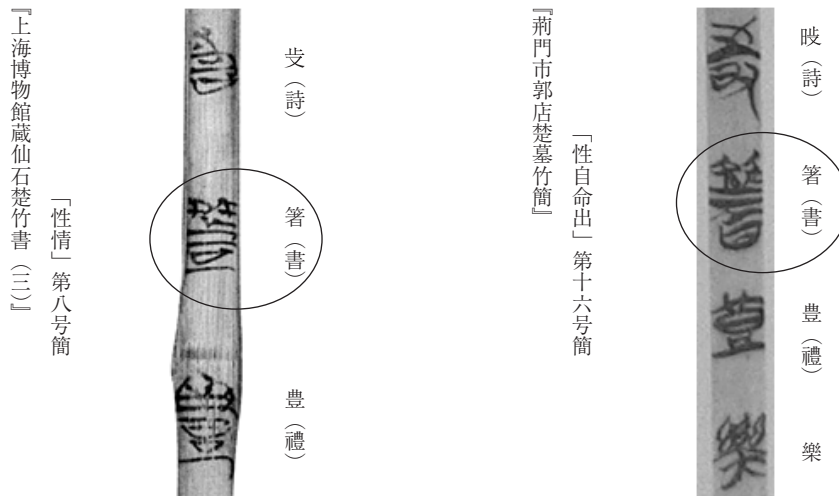


図2

当該箇所は「詩書礼楽」と読まれる箇所であるから、「箸」が「書」を表していることは明らかである。『説文』に拠れば、「箸」は「書」と同じように「者」を声符に持つグループに所属することから T-type と認めることができる⁽²³⁾。戦国楚簡中では T-type と L-type は互いに通仮しないことから（野原2009）、T-type 「箸」と通仮関係にある「書」も T-type 書母であると考えられる⁽²⁴⁾。そうでなければ T-type である「箸」を以て「書」を表すことはできないはずである。換言すれば、鄭張2003のように声母体系に T-type 書母を認めず、「書」を *hlja と再構すると、T-type と L-type を明確に区別する戦国楚簡中では「箸」で「書」を表すことはできないのである。本稿では T-type と L-type を明確に区別する戦国出土資料に T-type と通仮する書母が見ら

れることから、Baxter1992のように上古音声母体系に T-type 書母 *stj- を再構する。

このほかにも楚簡中では「陞」や「庶」等の書母と関連する例が見える。「陞」は「登」や「拯」等を表し、「庶」は楚簡中で「冢」（石声）と表記される⁽²⁵⁾。「登」と「拯」は諧声系列に拠れば T-type であり、これと通仮する書母「陞」も T-type 書母と考えられる。また「庶」は「遮」（章母）等と諧声関係にある一方で、邪母「席」とも諧声関係を有していることから T-type か L-type かの判断は容易ではないが、「庶」が戦国楚簡中で T-type 「冢」と表記されることを勘案すれば「庶」もまた T-type 書母と考えられる⁽²⁶⁾。このように戦国楚簡に見える現象に基づけば、T-type 書母の再構は積極的に認められる。

おわりに

以上、出土資料を用いた上古音書母再構の一つのモデルを示した。近年になって出土資料の発見・公開が進み、歴史や思想等の多くの分野から注目を浴びている。これは出土資料の製造された時代や出土地が明確であることや後世の手が全く加えられていないという点に起因すると思われる。上古音の研究についても同様であって、これまで見られなかった通仮例に分析を加えることでより精密な上古音の再構を進めることができるだろう。たとえば3-1. で示したように「復元の強度」の低い文字「身」「首」等についても、出土資料を用いることでその由来を明らかにすることが可能である。また3-2. で示したように T-type と L-type を明確に区別する戦国楚簡で、T-type の文字と書母字が通仮することを考慮すれば、上古書母に T-type に由来する書母を再構する必要があると考えられる。

今後は閩語書母との関係も考えねばならない。表1で示したように大多数の方言で書母は摩擦音で実現されるが、閩語については破擦音 [ts] 或いは [tsh] と実現される例が多く見られる。しかもそれぞれ諧声系列で分類してみると無気音で実現されるものには上古の T-type 書母が多く、有気音には上古の L-type 書母、N-type 書母が多い。第一口蓋音化の書母——すなわち X-type 書母——は閩語では摩擦音で現れる例が多い。このように閩語書母は上古の痕跡を有しているかの如くである。ただし、これに当てはまらない例も少なからずあり、閩祖語の再構および文字ごとの詳細な分析を要する。閩語書母の現象と上古書母の関係については稿を改めて論じたい。

注

- (1) 平山1967: 105-106参照。
- (2) T-type と L-type については野原2009: 67-85参照。
- (3) L-type については Pulleyblank1962: 116、1973: 116-117参照。
- (4) 楚簡中で「恕」は「女」と「心」に従う字「恚」に作られるため「女」を声符と考えることができる。
- (5) 透母「裕」については鄭張2003で *nhaanʔ と再構されるように無声鼻音を考えるのが一般的である。ただし無声鼻音に対する考え方に研究者間で必ずしも意見の一致があるわけではない（鄭張2003の無声鼻音につ

- いては野原2010: 72-73参照)。また「祭」は中古で娘母、徹母、心母等に読まれる。心母「祭」は *s-prefix を考えるのが良いだろうか(心母「祭」: *snas)。
- (6) 潘悟雲1996に従い上古の喉音に口蓋垂音を考えるならば、第一口蓋音化の書母を暫定的に Q-type 書母と称すことが出来るかもしれないが、ここでは X-type 書母としておくこととする。現在のところ潘氏の上古喉音に口蓋垂音を考える仮説は広く認められつつある。Sagart & Baxter 2009: 221-244も潘氏の仮説に修正を加え、上古喉音と牙音に口蓋垂音を認める。
- (7) 第一口蓋音化については河野1950/1979: 227-232参照。古屋2006: 207-221、大西2007: 62-76、大西2008: 513-518を参照されたい。「聖」と「聲」の通仮例は『郭店楚簡』「老子乙」12号簡、「性自命出」23、24、27号簡等に見える。Baxter & Sagart 2011は *ʎəŋ[ʎəŋ]と再構しており、「聲」を第一口蓋音化と考えていないようである。ある文字が第一口蓋音化を経たかどうかを見極めるのは簡単ではない。たとえば「𪔐」は第一口蓋音化を経て中古常母に読まれると考えられるが、実際には T-type に由来すると推定すべきである(野原2011b)。
- (8) 野原2010: 73-74参照。
- (9) たとえば「等」は端母蒸部、「峙」は章母之部である(陰陽対転関係にある。このほか「特」は職部であり「寺」を声符に持つ字は陰陽入のいずれも諧声関係にある)。ただし声符と思われる「寺」が邪母に読まれる点については解釈しがたい。「寺」は『説文』の説解によれば之声であり、之声字は典型的な T-type のはずである。それにもかかわらず「寺」は邪母に読まれるため何らかの説明を加えなければならない。例えば接頭辞 *s- を加えること等が考えられる(Baxter & Sagart 2011は「寺」を *s-daʔ-s[ʎəʔ-s] とする)。
- (10) 以下、合口については省略する。鄭張2003: 457が「賞」を *hjanʔ と再構する根拠については不明である。
- (11) 鄭張2003は複声母と無声鼻音の2類を考える。複声母は中古曉母、書母へと変化する鼻音に再構し、無声鼻音は後に破裂音へと変化する鼻音に再構する。たとえば *hn>x- (「漢」)、*nh->th- (「攤」というように(*hn-が複声母で*nh-が無声鼻音[ŋ])。
- (12) Baxter1992の段階では「聲」を *xjeng とするが、白一平2005では「聲」を *hleng と再構している。「収」を *s-kiw と再構するのは章母への変化と区別するためだろうか。たとえば第一口蓋音化の結果として中古章母に読まれる「旨」については *kijʔ>tsyijB と再構しており、書母への変化と区別しているようである。「著」についても *s-kij とするが、「屎」については *qʰijʔ(>syijX)、*ʎij(dial.*ʎ->x-) とあり、他の第一口蓋音化書母とはやや異なる。「屎」には中古書母と曉母の二音が有り *ʎ->x- という方言の存在の可能性を指摘している点も興味深い。
- (13) 白一平2005では出土資料に見える通仮を根拠に「身」を *hni[nŋ] と再構する。
- (14) 「錡」は『広韻』『集韻』耕韻に見える(口茎切)。
- (15) 王力1982: 231、鄭張2003: 466等参照。
- (16) Baxter & Sagart 2011では *ŋuʔ と再構する。
- (17) Sagart 1999: 155-156も「手」と「丑」との関係の根拠とする。また「手」と「丑」の関係については野原2011a: 7-24も参照されたい。
- (18) これは中古音再構にも同じことが言えるはずであるが、そのような例は上古音より遥かに少ないだろう。
- (19) 古屋2006: 216-217にあるように「人、身、仁、信、千、年」はいずれも真部に所属するだけでなく声母についても関連すると考えられる。
- (20) 通用可能範囲については古屋2009: 211-228、2010: 4-33を参照。
- (21) 鄭張2003: 127は親族関係にある言語や周辺言語との比較により *qhliuʔ と再構する。また「首」「手」「頭」の関係を根拠の一つとして(これら三字が同音であるはずがないということを根拠に)「首」を L-type と推定する説も見られるが(Sagart 1999: 155-156、鄭張2003: 126-127等参照)、「首」を L-type 書母と見做す積極的な根拠とは言えないだろう。
- (22) 『説文』に「書、从聿者声」とある。

- (23) 者声の文字というと、楚簡中には「箸」以外に「煮」が見える。たとえば『郭店楚簡』「緇衣」23号簡では当該字は「圖」に読まれる。「圖」は他声母と諧声関係を持たないため由来不明であるが、T-typeの「煮」と通仮することから「圖」もT-typeと考えて良いだろう(野原2009:77-79)。
- (24) 厳密に言えば、通仮と言えるか疑問の余地がある。楚では「書」を「箸」と表記する用字習慣があったのではないだろうか。いずれにせよ「書」と「箸」が同音或いは類音であったと予想される。
- (25) 「陞」は『上博楚簡(二)』「容成氏」31号簡等、『上博楚簡(三)』「周易」33号簡等、「庶」は『上博楚簡(二)』「魯邦大旱」2号簡、6号簡に見える。「庶」には「冢」だけでなく「𠂔」に作る字も見える。
- (26) ただし、庶声の「席」が中古で邪母zに読まれることについては何らかの説明を加えなければならない。Baxter & Sagart 2011は「席」を*s-dak|*s-[d]Ak|としている。

<参考文献>

- 古屋昭弘2006.「儒教と中国語学——出土文献と上古音——」,『近世儒学研究の方法と課題』:207-221頁。東京:汲古書院。
- 古屋昭弘2009.「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」,『早稲田大学大学院文学研究科紀要』54-2:211-228頁。
- 古屋昭弘2010.「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」,『中国語学』265:4-33頁。
- 平田昌司2010.「“水”の字音から」,『日本中国語学会第60回全国大会』:62-65頁。
- 平山久雄1967.「中古漢語の音韻」,『中国文化叢書1 言語』:112-166頁。東京:大修館書店。
- 河野六郎1950/1979.「中国音韻史研究の一方——第一口蓋音化に関連して——」,『河野六郎著作集2』:227-232頁。東京:平凡社。
- 野原将揮2009.「上古中国語音韻体系に於ける T-type/L-type 声母について——楚地出土竹簡を中心に——」,『中国語学』264:67-85頁。
- 野原将揮2010.「上古音研究における中国“新派”の研究」,『中国語学』265:69-78頁。
- 野原将揮2011a.「好」の字音とその単語家族～上古音研究と戦国楚地出土資料から～」,『漢字文化研究』1:7-24頁。日本漢字能力検定協会。
- 大西克也2006.「楚簡における第一口蓋音化に関わる幾つかの声符について」,『佐藤進教授還暦記念中国語学論文集』:62-76頁。東京:好文出版。
- 白一平2005.『出土文献和上古汉语的构拟』。上海:汉语上古音构拟国际学术研讨会。
- 北大中文系语言学教研室編2003.『汉语方音字汇(第二版)』。北京:语文出版社。
- 大西克也2008.「战国楚簡文字中读作舌根音的几个章组字」,『古文字研究』第27辑:513-518頁。北京:中华书局。
- 马承源主编2001~2008.『上海博物馆藏战国楚竹书(一)~(七)』。上海:上海古籍出版社。
- 潘悟云1997.「喉音考」,『民族语文』5:10-24頁。
- 王力1982.『同源辞典』。北京:商务印书馆。
- 荆门市博物馆編1998.『郭店楚墓竹簡』。北京:文物出版社。
- 野原将揮2011b.「仇雠的读音~以《清华简·耆夜》为例~」,『开篇』第30号。東京:好文出版。
- 郑张尚方2003.『上古音系』。上海:上海教育出版社。
- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Baxter, William H. Sagart, L. 1998. Word Formation in Old Chinese. In Jerome L. Packard (eds.), *New Approaches to Chinese Word Formation: Morphology, Phonology and the Lexicon in Modern and Ancient Chinese*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter. 35-76.
- Baxter – Sagart Old Chinese Reconstructions, version of 20 February 2011.
- Pulleyblank, E. G. 1962. The Consonantal System Of Old Chinese. *Asia Major* 9: 58-144.
- Pulleyblank, E. G. 1973. Some New Hypotheses Concerning Word Families in Chinese. *Journal of Chinese*

Linguistics 1-1: 111-125.

Sagart, L. 1999. *The Roots of Old Chinese*. Current Issues in Linguistic Theory Volum 184. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Sagart, L. and Baxter, William H. 2009. Reconstructing Old Chinese uvulars in the Baxter-Sagart system (Version 0.99). *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 38-2: 221-244.

Schuessler, Axel. 2009. *Minimal old Chinese and later Han Chinese : a companion to Grammata serica recens.* University of Hawaii press.

提要

本文的主要目的是通过利用出土文献的通假字来构拟上古音书母。根据谐声符的分析，上古音书母可以分成5类：第一类是“T类书母”，第二类是“L类书母”，第三类是“N类书母”，第四类是“X类书母”，第五类是“来源不明的书母”。关于上古音书母的拟音学界仍存在着些争论。譬如白一平1992把“书”字构拟成 *stj-，郑张2003不把它构拟成 *stj- 而构拟成 *hlj-。本文以战国楚简为研究对象进行分析，发现“书”跟T类的“著”有密切的关系。因此本文重构上古音声母系统中的“T类书母”，把“书”字构拟成 *stja。另外，有些书母字若根据谐声系列则无法确定其来源，譬如“身”“首”等。本文试图根据楚简的通假现象来确定其来源。

关键词 上古音 声母 书母 楚简 通假

本稿は日本学術振興会平成23年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。